

〔文献解題〕

## 富士晴英とゆかいな仲間たち 『できちゃいました！フツの学校』を読む

— 宝仙学園中学・高等学校の教育実践から何を学ぶか —

助 川 晃 洋

我が国の教師の世界には、教育の事実を独特の形で記述する文化が存在する。子どもと一緒に過ごした経験を、教師の「私」を主語として、物語や小説、エッセイ、日記といった一種の文学の様式で綴ること、すなわち一人称の語り（ナラティブ）としての実践記録である（事典上での「教育実践記録」に関する説明は<sup>(1)</sup>、これと一致していない）。

その発生は、大正新教育を担った一群の教師たちを起点としており<sup>(2)</sup>、以後、『山びこ学校』を皮切りとする実践記録のめざましい刊行<sup>(3)</sup>が続き、ブームが最高潮に達した1950年代<sup>(4)</sup>、そして「日本教育史における空白」（小国喜弘）<sup>(5)</sup>の期間という否定的な評価とは裏腹に、実は二度目のピークと言ってよいほどの盛り上がりを見せた1970年代を経て<sup>(6)</sup>、これまでに数多くの著作が発表されている。本稿で俎上に載せる書物は、こうした流れの延長線上にあり、しかも最新のものとみなし得ると主張するならば、それはあまりにも飛躍し過ぎた見方であり、好意的な偏見であろうか。

\* \* \* \* \*

宝仙学園中学・高等学校（学校法人宝仙学園の系列下で運営され、東京都中野区に所在する私立中高一貫校）の校長である富士晴英と同校の教師たちが執筆した『できちゃいました！フツの学校』（以下、本書）が、2020年に岩波書店から刊行されている（7月17日初版第1刷発行、新書判、全202頁、本体860円＋税、ISBN978-4-00-500922-0）。その本論部分の構成と各章の概要は、次の通りである（「まえがき」と「まさかのあとがき—『休校要請』から学校再開へ」、「あとがき」は除く）。

## 第1章 これでも校長です！－問わず語りの教育論（富士）

- 1 学校とは、「知的で開放的な広場」だ！
- 2 高校生は、「自己ベストの更新」を目指そう！
- 3 中学生には、「自己肯定感」をもってほしい！
- 4 しくじり先生として、「君たちはどう生きるか」を問う！
- 5 「学ぶ」ってどんなこと？自分で感じ、考えることから始まるのかもしれない！

## 第2章 ゆかいな仲間たちの楽しい学び

- 1 フツールの学校の楽しい学び（右田邦雄）  
理数インターで学んだこと（飛田祥太）  
英語プレゼンという人生最大の恐怖の時間!?（相澤陽太）
- 2 「答えのない学び」、これまでとこれから－教科「理数インター」の誕生（米澤貴史）  
教科「理数インター」でこんなに変わった！（中学生たちとの雑談会）
- 3 自分の思いを伝える読書プレゼン（金子忠央）  
自分の好きな本について話そう！（中学生・高校生たちとの読書雑談会）
- 4 フツールのJKが世界大会まで出場しちゃいました!!（氷室薫）  
私たちの部活哲学（女子部ダンス部8期生たちとの雑談会）

## 第3章 もう一度、「あなたは、この学校をどんな学校にしたいのか？」（富士）

第1章では、「知的で開放的な広場」、「自己ベストの更新」、「自己肯定感」、「偏差値より学習歴」、「君たちはどう生きるか」、「答えのない学び」、「挑戦なくして成長なし」といった大切なキーワードやスローガンについて、自身の過去のエピソードを交えつつ、富士から順次説明がなされ、彼のユニークな教育観が披瀝されている。

第2章では、中学・高校共学部理数インターの独自教科「理数インター」を通じて子どもに身につけさせたい力（論理的思考力やコミュニケーション能力など）と授業の実際、魅力的な図書室づくりと読書プレゼンの実施、高校女子部ダンス部の世界大会出場について、生徒たちの生の声を紹介するとともに、各担当教員の報告が行われている。

第3章では、第1章で述べた自らの教育観に基づく実践を振り返りながら、その成果と課題が、富士によって極めて簡潔に総括されている。

そして本書全体を見ると、精緻なロジックの学術書とは異なり、客観的に裏づけられた個別的知見を集積し、一つのまとまった結論を成すところまで行き着いているわけでは決してない。むしろ自校の「フツー」（模試の成績が私学受験層のボリュームゾーン、アベレージレベルにある）の中・高生に対する富士らの様

々なメッセージやエールで溢れており、しかもそれらが、各所に散在している。しかしどれも皆最終的に、「しくじり OK！さあ、やってみようよ！」の一言に集約される流れになっていることはいかかえ。宝仙学園中学・高等学校では、生徒は何事にもチャレンジすべきだ、失敗してもいい、むしろ知的・社会的・精神的な成長につながると考えられている。すなわち間違えることが、人間形成を促すポジティブな要因とみなされている。教師は、子どもたちが誤りを犯し、それを自覚し、試行錯誤によって克服することができる自由な、応答的な、援助的な環境を作り上げている。このような教師－生徒関係の構築は、例えば1980年代にアメリカで提唱された「誤りから学ぶ教育」<sup>(7)</sup>や、我が国の学級・学習集団づくり（「教室は本気でまちがうところだ」）<sup>(8)</sup>の理論と実践に通じるものがあるように思われる。

ところで従来の教育学研究では、実践事例として、国立教員養成系大学・学部の附属学校や先導的かつ先進的な研究開発、或いは地域の切実な課題に取り組む一部の公立学校ばかりが取り上げられる傾向にあり、私立学校は考察対象の埒外に置かれてきた。本書がきっかけとなって、そうした状況に変化が生じてもおかしくない。ぜひとも第2弾を期待したい。

\* \* \* \* \*

助川と坂本徳雄（元宝仙学園中学・高等学校副校長、2015年4月から2019年3月まで）は、宝仙学園中学・高等学校の取り組みに着目して、すでに（この原稿の提出期限である2020年10月31日までに）8本の論文と2冊の報告書をすべて共同で発表している（以下のリストでは、著者名を省略し、誌名、号数、発行所、年月が同上的な場合は、あえて記載を控えた。いずれも煩雑になるのを避けるための措置である）。

#### <論文>

「『社会に開かれた教育課程』の概念と実践－学習指導要領の基底－」、『教育学論叢』第35号、国士館大学教育学会、2018年2月、pp.109-120.

「高大接続カリキュラムの開発過程－高校側の視点から－」、第36号、2019年2月、pp.63-75.

「教育実践におけるパターン・ランゲージの活用－宝仙学園中学校独自教科『理数インター』の場合－」、pp.77-90.

「高校教育における学習評価の充実志向－eポートフォリオの導入・活用と多面的評価の推進－」、pp.91-105.

富士晴英とゆかいな仲間たち『できちゃいました！フツの学校』を読む（助川晃洋）

「私立中学校におけるコンピテンシー・ベースの教育方法改革実践— 21 世紀型  
資質・能力の育成をめざして—」、第 37 号、2020 年 2 月、pp.77-91.

「学力評価方法としての定期考査の再検討—宝仙学園中学校における中間テスト  
廃止の実践を手がかりに—」、pp.93-106.

「私立中高一貫校における接続／アーティキュレーションの課題—宝仙学園中学  
・高等学校の場合—」、pp.107-119.

「教科指導実践における『見方・考え方』の練成—中学校英語の授業を取り上げ  
て—」、pp.121-131.

< 報告書 >

『21 世紀型資質・能力の育成をめざす私立中高一貫校の教育方法改革実践—宝  
仙学園中学・高等学校を事例として—』、国土舘大学大学院人文科学研究科、  
2019 年 3 月、40p.

『コンピテンシー論に基づく学びの改革—国際標準の学力を育成するために—』、  
2020 年 3 月、36p.

現在は、いくつかの続編に加えて、ワークショップ型学習や「考え、議論する  
道徳」、ICT を基盤とした学びの個別最適化（アダプティブ・ラーニング）<sup>(9)</sup> 等  
に関する新作を同時に準備中であり、それらを仕上げた後も、引き続き授業観察  
やインタビュー調査を実施し、そこで得たデータに基づく実証的な研究を行って  
いく予定である。その際に本書は、重要な基礎資料として、有益な情報と問題解  
決の視点を我々に与えてくれるに違いない。

注

(1) 高田清「教育実践記録の読み方・書き方」日本教育方法学会編『現代教育方法事典』  
図書文化社、2004 年、p.504.

(2) 浅井幸子『教師の語りと新教育 「児童の村」の 1920 年代』東京大学出版会、2008 年

(3) 海老原治善『現代日本教育実践史』明治図書出版、1975 年、p.25.

(4) 無着成恭編『山びこ学校 山形縣山元村中学校生徒の生活記録』青銅社、1951 年

相川日出男『新しい地歴教育』国土社、1954 年

小西健二郎『学級革命 子どもに学ぶ教師の記録』牧書店、1955 年

土田茂範『村の一年生』新評論社、1955 年

小林実『幼い科学者』新評論社、1956 年

須田清『ガリ版先生—親ぐるみの教育実践—』新評論社、1956 年

戸田唯巳『学級というなかま』牧書店、1956 年

野名竜二『かえるの学級 村の二年生』新評論社、1956 年

東井義雄『村を育てる学力』明治図書出版、1957 年

斎藤喜博『学校づくりの記』国土社、1958年

これらに加えて、平野婦美子の『女教師の記録』（西村書店、1940年）や小滝操子の『愛の女教師』（金星堂、1940年）、『女教師の愛情』（文徳社、1949年）を彷彿させるような、女性教師による作品が相次いで出版されている。

四谷静江『女教師の教室記録』双竜社、1951年

山田とき『路ひとすじ 女教師の記録』東洋書館、1952年

品角小文・服部道子・中村芳子・辻本道子『女教師』三一書房、1958年

古川原『女教師であること』明治図書出版、1958年

- (5) 金子章予「1970年代における仲本正夫の教育実践の意義」『西武文理大学サービス経営学部研究紀要』第25号、西武文理大学、2014年12月、p.12.
- (6) 高瀬勇編著『工業高校 その闘いと教育の本質』三一書房、1970年  
武田常夫『真の授業者をめざして』国土社、1971年  
青木嗣夫編著『僕、学校へ行くんやで 与謝の海養護学校の実践』鳩の森書房、1972年  
本多公栄『ぼくらの太平洋戦争』鳩の森書房、1973年  
岸本裕史『どの子も伸びるー教師と親でつくる教育ー』部落問題研究所出版部、1976年  
桐山京子『学校はぼくの生きがい 自殺、登校拒否をこえて』労働旬報社、1977年  
林竹二『教育の再生をもとめて 湊川でおこったこと』筑摩書房、1977年  
鈴木正気『川口港から外港へー小学校社会科教育の創造ー』草土文化、1978年  
若林繁太『教育は死なず どこまでも子どもを信じて』労働旬報社、1978年  
仲本正夫『学力への挑戦 “数学大きらい”からの旅立ち』労働旬報社、1979年
- (7) H・J・パーキンソン著、平野智美・五十嵐敦子・中山幸夫訳『誤りから学ぶ教育に向けて 20世紀教育理論の再解釈』勁草書房、2000年
- (8) 吉本均編著『「まなざし」で身に語りかける』明治図書出版、1989年 (<https://www.meijitosh.co.jp/detail/4-18-245505-3>、2020年9月11日入手)
- (9) society 5.0に向けた人材育成に係る大臣懇談会・新たな時代を豊かに生きる力の育成に関する省内タスクフォース「society 5.0に向けた人材育成～社会が変わる、学びが変わる～」2018年6月5日  
文部科学省「新時代の学びを支える先端技術活用推進方策(最終まとめ)」2019年6月25日

## 参考文献

勝田守一『勝田守一著作集第3巻 教育研究運動と教師』国土社、1972年

坂元忠芳『教育実践記録論』あゆみ出版、1980年

富士晴英「吉野源三郎と『世界』」『歴史評論』第553号、校倉書房、1996年5月、pp.47-62.

富士晴英とゆかいな仲間たち『できちゃいました！フツの学校』を読む（助川晃洋）

富士晴英「<定例セミナー講演要旨>知的で開放的な広場―宝仙学園中学・高等学校『理数インター』のこれからの10年」『私学経営』第502号、私学経営研究会、2016年12月、pp.45-53.

追手門学院大学成熟社会研究所編『一人で思う、二人で語る、みんなで考える実践！ロジコミ・メソッド』岩波書店、2020年

（すけがわ あきひろ・教授）